

特集 英語を学ぶ視点の育成

英語教育で
世界観を広げる

高橋 貞雄 (玉川大学)



1. 多文化教育の必要性

英語教育の目的は、英語という言葉教え、英語でコミュニケーションができるようにすることだけではない。言うまでもなく、英語は外国語のひとつである。したがって、英語を通して英語圏の文化だけでなく、世界のさまざまな文化を学ぶ機会を提供することが英語教育の目的のひとつである。このことは、学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」の中でも明確に述べられている。

さて、国際化が進む中でボーダレスな社会は予想以上のペースで現実的なものになってきている。例えば、駅や地下鉄の案内は中国語や韓国語などの複数の言語で標示されている。何年前にはあまり考えられなかったことである。これは、多民族・多文化社会が現実化していることの証である。これからの社会を担う日本の子どもたちは、国際社会の中だけでなく、日本の社会においても多文化と向き合っ生きていかなければならない。

米国などでは以前から、multicultural education (多文化教育) が行われている。これは、さまざまな言語や文化を持つさまざまな民族がお互いの違いを乗り越えて、どのように共生していくべきかを教えるものである。日本には、従来から単一言語・単一民族社会という狭い考えがあり、多文化教育はあまり行われてこなかった。しかし今世界を見たときに、日本的な考え方や米国的な考え方だけでは成り立っていないことは明らかである。中学生のような澄んだ目、柔軟な心を持つ段階においてこそ、世界を見る態度や価値観の違いを受け入れる心を養うべきだと思う。

2. 自文化発信の前提

現在、英語教育に求められていることは、単に異文化を理解するだけでなく、自己表現能力を身につけ、積極的に日本文化を発信することのできる力の育成である。しかしだからといって、日本の祭りやスポーツを単に英語で言う練習をすれば、その力が養われるのであろうか。大事なことは、世界の文化やものの見方・考え方を学び、それに対して「日本ではこうする」、「自分はこう思う」という表現する態度の育成である。その意味では、比較文化的なアプローチはとても重要である。つまり、異文化吸収型でもなく、自文化発信型でもなく、文化交流型の教育が、これからの英語教育に求められるのではないかと考える。

3. 気づきを与える題材

多文化教育を行い、世界観を広げることの重要性を述べてきたが、では、教科書はどうあるべきだろうか。簡単に言えば、文化に対する気づきを与え、それを自分に照らして考えさせるようなアプローチを取ることである。たとえば、ニューヨークに自由の女神像があるとか、ロンドンにビッグベンがある、といった観光旅行的なアプローチは文化教育としては物足りない。「知識」以外の気づきを与えてくれないからである。

ここで、2006 (平成 18) 年度版 *NEW CROWN* で新たに多文化教育を想定して用意した題材をいくつか紹介しておきたい。

① 1年 LET'S READ 1 What Do You Treasure?

これは、世界のいろいろな国の子どもたちがやり

取りをしながら、それぞれの「大切なもの」「宝物」について語っている読み物である。この中で、例えばスリランカの少女チャキラは「木」が自分の大切なものだという。日本で、木が自分の宝物だと言う中学生はどれだけいるだろうか。ここでは、価値観は国によって、人それぞれによって異なるのだ、ということが題材である（先のスマトラ沖地震でチャキラは無事だっただろうか、大切な木は残っているだろうか、と感情移入のできる子どもが出てくればうれしいものである）。

② 2年 LESSON 6 Ratna Talks about India

インド出身のラトナが、インドのことを紹介しているレッスンである。インドは、承知のように、多言語、多文化国家である。その意味で、インドを題材として取り上げること自体が多文化教育になるとも言える。この中で、ラトナが bandanna や shampoo がインドの言語のひとつであるヒンディー語からきていると教えてくれる。日本の子どもたちにしてみれば、馴染みのある「バンダナ」や「シャンプー」は当然英語に由来すると思うであろう。ここで、英語は実はさまざまな言語や文化が入り込んだ言語である、ということを知ることができる。これが「気づき」を生む。日本の子どもたちが、日本語も英語に入っているかもしれない、と考えることができれば成功である。

③ 3年 LESSON 3 Kumi Visits China

日本人の久美が姉妹都市の交流で中国の北京を訪れる。そこで気づいたことを友だちにメールで知らせてくる設定である。久美は、ホームステイ先の夕食にご馳走がたくさん出てきて食べきれずに残してしまう。しかし、中国では食べ物を残しても問題はないという。日本では、出された食べ物は残さずに食べるのがエチケットだと思っている久美にとって、これは新鮮な異文化体験であった。同じアジア圏であっても、食文化にちょっとした価値観の違いがあることを気づかせてくれるレッスンである。

④ 2年 LET'S READ 2 Zorba's Three Promises

これは、猫のゾルバとカモメの交流を描いたストーリーである。「約束」をテーマにした感動的物語であり、多文化教育を第一に想定しているわけで

2年 LESSON 6

ラトナが友だちにインドのことを紹介しています。

① Ratna: This is a photo of my sister.
Ken: Oh. What's she wearing?
Ratna: A sari.
Ken: It's beautiful.
Ratna: Thank you. She likes wearing a sari. And you like wearing a bandanna, don't you?
Ken: Of course.
Ratna: The word 'bandanna' is from Hindi, an Indian language.
Ken: Really?
Ratna: Yes. There are many Hindi words in English, for example, 'shampoo'.

★ I like soccer.
I like playing soccer.

CHECK IT 聞いてみよう (聞いてみよう)

photo [fəʊto]	wear [weɪə]	don't you? [dɒn't juː?]	sari [sɑːri]	bandanna [bændənə]
Hindi [hɪndi]	Indian [ɪndiən]	Indian [ɪndiən]	shampoo [ʃæmpuː]	[ʃæmpuː]

52 My-foo

はない。この話の中に、ゾルバがカモメのひなに飛ぶことを教える場面がある。ゾルバに育てられたカモメのひなは、自分が猫だと思っており、なぜ飛ばなければならないのかと言う。そこでゾルバは次のように言い聞かせる。

You are a gull. I am a cat. Cats do cat things.

Gulls do gull things. Each is good. Each is different. We must respect differences.

新版の *NEW CROWN* はこのようなところにも、それぞれの文化やアイデンティティを尊重する種を仕込んでいく。

4. 他との関係づくり

今の子どもたちは生きる世界が狭い、とよく言われる。自分の興味のある遊びや勉強、そしてわずかな友人としか関わろうとしない。たとえ小さな気づきやきっかけであっても、子どもたちの視野を広げるサポートが必要である。*NEW CROWN* で学ぶ子どもたちが、英語の授業を通して他の世界との関係を築く糸口を見つけ、それがこれからの国際社会、多文化社会で生きていく力になってくれることを心から願っている。コミュニケーション能力の育成も、もとをたどれば他者との関係づくりから始まるので